

Title	続リカルドオの価値学説論 (二、完)
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.9 (1922. 9) ,p.1225(21)- 1261(57)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220901-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

烈を極めるが之によつて双方共に痛手を受けて結局妥協するに至るか合同するに至るを常とする。他の交通機關に就ても、相手方が大規模の組織的經營となる場合には並行鐵道間に於けると同様の結果に達することが少くない。然しながら、假令妥協は行はれても單に積極的の競争行爲が中止せられるに過ぎないのであつて互に相手方の意思に掣肘せられるの點に至つては變りはない。表面頗る平穩無事の間に並存して居る場合に於ても同様である。況んや、並行せざる鐵道相互間に起り得る競争、並に小規模の經營の下に在る他の交通機關特に道路上及び水路上の交通機關との間に於ける競争乃至牽制は、殆んど絶えず相互的に行はれて居るのである。

斯る競争又は牽制を受ける程度は鐵道によつて同一ではない。一方には殆んど何等斯る掣肘を受けざるものも存し得ると同時に、他方には是等總ての種類もの掣肘を受けるものもあり得るのである。他の交通機關の掣肘を受ける此の程度の相違は、即ち、國家の制禦と相俟つて、鐵道が特に運賃の決定に際して公衆に對して取る態度の上に相違を生せしめることになるのである。

續リカルドオの價值學說論(二、完)

小泉 信 三

(七)

Cairnes が價值は諸貨物が公開市場に於て相互に交換せらるゝ比率を現はすもの、價格は價值の貨幣にて現はされたるものなりと謂ひ、而して價值存在の要件として利用、獲得の困難、及び可讓渡性の三者を挙げたる(Some Leading Principles of Political Economy Newly Expounded, 1874 pp. 347. q)は、概ね前人の踏襲に出づるものと謂ひて可ならん。彼れはまた Cherbuliez に倣ひて、傳來の自然價格なる術語に代ふるに常規價格又は常規價值(normal price or normal value)の語を以てしたりと雖も(p. 40)所謂常規價值は市場價值動搖の引力中心點たるものなること從來學者の所謂自然價格と異なるどころなし。Cairnes の學說にして特に稍詳かに傳ふべきは、その勞働者の間に階層ありて、同階層者相互間には競争行はるゝも、異階層間には競争

行はれ難き爲め、労働の犠牲とその受くるところの報酬とは均衡することを得ざるの事實に着目し、此點よりして貨物の常規價值と其生産費と相疎隔し得べきの理を力説せるもの是なり。

Cairnesが謂ふところの生産費とは何ぞ。彼れは先づ Seniorと同じ立脚地よりして M^{III}が生産上の費用と費用に對する報酬とを混同したる非論理を責む。曰く、「經濟的思辨の範圍内に屬する有ゆる觀念中相互に最も根本的に相反するものは、費用と費用の報酬と是なり。……費用と報酬とは相互に相反概念をなせり。……然るに予の引用せる M^{III}の生産費分析に於て、此の二つの相反物は同一視せられ、犠牲なる費用、人間が自然に對して、産業的報酬を得んが爲め支拂ふものたる費用は、賃銀及び利潤、即ち自然が産業的犠牲に對して與ふところのものより成れりと言はるゝなり」と (p. 50)。Cairnesは費用の犠牲にして、斷じて犠牲の報酬にあらざることとを力説するものなり。生産上の犠牲は、彼れに従へば、労働と節欲と危険 (三六) とより成り、文明諸國に於ては、労働は廣義に於ける、労働者、節欲は資本家、而して危険は労働者資本家並に之を負擔すと謂ふ (pp. 81-3)。然れども、彼れが危険に就て

費やすところは、僅かに數言に止まり、その生産費として、常規價值との關係に於て論ずるところは、専ら労働と節約とに限られたり。而して一貨物生産費の測定は、労働にありては、其生産上に雇傭せらるゝ平均労働者の數と其労働時間との積 (同時に労働の寛嚴及び之に伴ふ危険の程度を斟酌す) に由りて之を行ひ、節欲にありては、享樂を節したる富の量に、含むところの危険を顧慮し、之に節欲の期間を乗じたる積によりて之を行ふものとす (p. 97)。この労働及び節欲によりて感ずるところの苦痛は人によりて同じからずと雖も、Cairnesが價值に影響すと認むる生産費は各人個別の犠牲にあらずして、平均犠牲是なり。曰く「顧慮すべき犠牲、交換價値を支配する犠牲は、A B 又は C の関みしたる犠牲にはあらずして、貨物生産者たる資本家又は労働者の所屬階級が関みしたる平均犠牲是なり」と (p. 95)。

(八)

Cairnes が生産費の語に由て解するところは右述の如し、此生産費は果して、又幾許の度に於て貨物の交換價値に影響すべきか。Cairnes 以爲らく、人のその労働者たる資本家たるを問はず、敢て生産上に犠牲を拂ふことを辭せざるは、之に

對する報酬を得んと欲するを以てなり。而して犠牲に對する報酬は、究局生産物の價值を其源泉とす。「斯の如く各産業部門に於ける賃銀及び利潤は、該産業部門にて生産せられたる諸貨物の價值より生じ、而して地代の同じく貨物價值中の一要素たる場合を除けば——而して地代の經濟理論に親しめるもの、認むべきが如く、此場合は大體の論證を動かすものにあらず)賃銀及び利潤はまた價值の全額を吸収するを以て、他の事物にして同一なる限り、當然生産者の一定集團が收得する賃銀及び利潤の總額は、常に彼等が生産する貨物總量の價值と共に變化すべし。故に諸産業に於ける賃銀及び利潤の、忍べる犠牲に比例せるところに於ては、是等諸産業にて生産せられたる諸貨物の價值は同じ犠牲に比例すべし、換言すれば諸貨物は其生産費に比例して相交換せらるべし」と(Pp. 61-2)。

即ち Cairnes に從へば、勞働の報酬たる賃銀と節欲の報償たる利潤とにして果してよく各々其犠牲に比例することを得ば、是等賃銀と利潤との合成する貨物の價值は、またその生産費に比例すべしと謂ふにあり。故に貨物の價值が果して其生産費に比例するや否やは、懸りて賃銀の果して諸産業を通じて勞働の犠牲に比例するや、利潤の果して節欲の犠牲に比例するや否やに存すべき理なり。然るに賃銀と利潤とは、生産者の間に完全なる競争の行はるゝ限りに於てのみ、即ち各勞働者各資本家が自由にその欲するところの産業に勞働又は資本を投じ得る事實上の撰擇權を有する場合に於てのみ、よく忍べる犠牲と比例す。「故に競争は産業上の報酬と犠牲との一致に對する保障たると同時に、またそれあるの故を以て、諸貨物の價值とその生産費との一致に對する保障たるものなり。」(p. 63)

然らば勞働及び資本の間には果して完全なる競争行はるゝや否や。資本に就ては Cairnes その然るを認め、「資本の競争は……各商業國の全産業を通じて有效に行はるゝを以て、諸貨物の價值の、資本家の犠牲に對する報償に充てらるゝ、利潤基金」と認むべき部分は、國內産業の全範圍を通じて、費用中の資本家の負擔する部分と一致すと云ふも(P. 74) 勞働に就ては、前段に記したる如く、競争は勞働者の各階層内部に於てのみ行はれて、異階層間に行はれざるを以て、異階層に屬する勞働者の生産物は、相互其生産費勞働の犠牲に比例して交換せらるゝことなきを力説するものなり。謂へらく、事實上吾人の目睹するところのものは、無差別に相競争

せる全人民にあらずして、相累なれる一聯の産業的階層なり。而して是等各階層内部に於ては、幾多の就職候補者は實際の有効なる選擇權を有するも、別の諸層を占むる者は、有効なる競争を行はんとするが爲めには、事實上相互に孤立せるなりと。Cairnesは試みに是等諸階層を分ちて、第一に最低位を占むる無熟練若しくは無熟練労働者(農業労働者を含む)、第二に工匠、指物師、鍛工、石工、靴工、裁縫師、製帽工等の如き第二級熟練労働者を包含する手工業者の集團、第三に例へば機械及び土木技師、藥劑師、眼鏡師、時計工等の如き、其仕事の資力あり有利なる教育の機會あるもの、み修得することを能くする資格を必要とする生産者及び商人の一團、第四に學者藝術家其他 profession に従事するもの、及び略ぼ是と同地位にあるもの、一團となしたり。固より是等の諸階層間の境界は、踰越すべからざるものにあらずと雖も、之を能くするは例外の人の場合にして、普通労働者にありては、何れの階層に屬するを問はず、その能くし得るは、事実上限定せられたる特定の職業間に於ける競争のみにして、上級の層に於て、人の如何なる有利の報酬を受くるあるも、彼れは往いて之に與かること能はざるなり。Cairnes の不競争團 (non-competing groups or non-competing industrial groups) と稱するものは、斯の如く相互間の競争の事実上遮断せらるゝ産業上の諸階層の謂なり。

労働者間の階層の相互の競争を妨ぐることを斯の如くなりとせば、各層労働の生産物は、同層労働の生産物とは各其生産費に比例して相交換せらるべしと雖も、その異層労働の生産物との交換比率は、當然其生産費に適應することなかるべきの理なり。不熟練労働の生産物は他の不熟練労働の生産物と、普通手工業者の生産物は他の手工業者生産物と、何れも其生産費に比例して相交換せらるべしと雖も、手工業者の生産物と不熟練労働の生産物とは、その生産費に比例して相交換せらるゝことなし。例を以て説かんに、一樅材卓の價格と普通鎖錠の價格とは、其生産者が現に忍べる犠牲に相應すべく、又一晴雨計の價格と一時計の價格とは、同じく其生産費に相應すべしと雖も、晴雨計又は時計の價格と樅材卓又は錠前の價格とを比較するときは、其比は各自の生産費には比例せずして、前二者の價格の其生産費の比例以上に高きに居ることを見るならん。蓋し同層に屬する或労働者の、特に高率の報酬を受くるものあるときは、其儕輩は競ひ集り來り、同種貨物の生産額

を増加せしめて其價值を下落せしめ、從て勞働に對する報酬を下落せしむべしと雖も、上層勞働者が高率の報酬を受くるに對しては、競争に由りて之を下降せしむるの途なし。……一定の局限せられたる産業的區域内に行はるゝ取引上に於ての交換價值は、生産費の原則之を支配すと雖も、諸多の區域と區域との間に於ける相互取引に於ては、其作用行はれざるなり」(p. 75)。斯の如く費用法則は「普遍的に如何なる階級の貨物の價值をも支配するものにはあらずして、或貨物の或交換に於ける價值を支配する」に過ぎざるものなり。

(九)

生産費の法則の適用範圍は斯の如く狭められたり。然れども Cairnes の所見に従へば、不競争團相互間に於ける貨物の交換比率は、何等の法則準繩に遵ふことなくして恣に變動するものにあらず。同階層生産物間の現實交換比率が生産費を中心とし、之に歸着せんとして其周圍に旋回するごとく、異層貨物間の交換比率も亦其歸嚮中心を有し、而して之を定むるものは所謂相互需要の法則 law of reciprocal demand 是なりと云ふ。此法則は素と J. S. Mill が國際間の貨物交換比率(國際

價值)を説明せんが爲め立てたるものにして、其要旨を約説すれば、國際價值は通商諸國の各々他國生産物に對する相互需要に由りて、或は一層的確に之を云へば、各一國の生産物に對する有ゆる他の國の需要と、之に對立する其國の他の有ゆる國の生産物に對する需要とに由りて決せらるゝなり。此諸力作用の結果は、一國の輸出は全體に於てその他の凡ての國に對する債務を果たすこと是なり。諸國に於て此結果を確保する爲め必要なる交換比例が如何なるものにもせよ、是等の交換比例は常規のものとなり、國際價格動搖の歸向すべく、究局に於て之に一致すべき中心たるべしと云ふこと是なり(Pp. 99-100)。Cairnes は不競争團相互間の交換は、國際間の交換と理に於て正に同一なるものと認め、彼の Mill の法則を借り來りて、之を此種の交換に於ける常規價值の法則に充てたるものなり。たゞ生産費の法則も相互需要の法則も、共に貨物の市場價格の動搖中心を説明するものなりと云ふと雖も、其趣きは同じからず。Cairnes に従へば、生産費は個々の貨物の價格動搖の中心を定むるものなれども、相互需要が定むる中心は、多數貨物の總體の平均動搖に係はるものなり。帽子の生産費の減少は、帽子の價格を下降せしむべしと雖

も、二通商國間に於ける相互需要の變動は、特定の一貨物の價格に影響するものにあらずして、貿易商品悉く其影響を被るものなり。國內に於ける不競争團相互間の交換に於ても亦同一の理行はると云ふ(Pp. 105-6)。

然れども、國際貿易と國內に於ける不競争團相互間の交換との比論は、今詳説することを須るべし。吾人の留目せんとするところは、勞働者間に階層の存するある爲め、其相互の競争妨げられて、勞働の犠牲と其受くることの報酬たる賃銀との不平均を來たし、而して之が爲めに生産費が價值を支配する領域の甚だしく局限せられたる一事是れのみ。Cairnes が所謂生産費は、既記の如く勞働と節欲と危険とより成れるものなるを以て、假令完全なる競争行はれて、生産費よく價值を支配し得たりとするも、猶ほ勞働は此生産費中の僅かに一要素たるに過ぎず。危険の一事は姑らく之を除外するも、猶ほ節欲は勞働と相並んでよく價值を動かす原因たる事を得るなり。而して今勞働者間に階層ありて、相互の競争妨げらるゝが爲め、價值が生産費の支配を受くる場合の局限せらるゝこと上記の如くなり。とせば、生産上に費さるゝ勞働量の價值に及ぼす影響は、愈々間接稀薄ならざるこ

と能はず。予は曩きに(本誌前號二八頁)資本家(企業家)が生産の主宰者たることに於て、貨物市場價格の旋回中心たる自然價格が、投下勞働量に比例せんが爲めには、第一賃銀額の正確に投下勞働量を反映すること、第二資本家(企業家)の支出する資本中に於て賃銀の占むる比例の同一なることの二條件備はるを要すと云へり。而して第二の條件の事實上備はり難きことを認むるは、恐らくRicardoの欲せざりしところならんも、猶己むことを得ずして之を敢てしたり。第一の條件に至つては、Senior, J. S. Mill相踵いでその同じく備はり難きことを指示したりしが、Cairnesは最も此點に力を注ぎ、投下勞働量と賃銀との比例し難き場合多きことを論證せんとしたるものなり。勞働者間に上下種々の階層ありて、下層の者の自由に上層者と競争すること能はざる爲め、上層者が特に其勞働に比して高率の賃銀を收得することは、吾人の日常目撃するところにして、而かも此事實は、少なくとも現經濟社會の下に於ては之を目するに一時的變態現象を以てすべからざるものなり。たゞ或はRicardoは姑らく常に自由競争の完全に行はるゝことを前提として立論したるものなるを以て、Cairnesの不競争團の説は、形式上Ricardoが結論の價值を傷くる

ものにはあらず、と云ふ者あるべく、予も亦勞働價值説に存する困難としては、後人の所謂資本の有機的組成の異同に重きを措きて、賃銀率と勞働量との不均衡を第二にするものなりと雖も、猶ほ今 Cairnes の所説に照らして見るときは Ricardo は甚だ事實に遠き假定を基礎として論を進めたりとの評を免るゝこと能はざるべし。勞働價值説に近き Ricardo の生産費説を以て出發せる英吉利經濟學は、上記の如く約半世紀にして、漸く勞働價值説より隔たれる生産費説に到達せり。而して全體として之を通觀すれば、此推移の過程には過失なし。此推移は當さにあるべくしてあり、已むことを得ずして玆に到りしものなるなり。此は嘗に Ricardo の學説に於て然るのみならず、有ゆる勞働價值説又は勞働價值説に傾かんとする學説の上に當さに加へらるべき修正なり。資本家(企業家)が生産の主宰者たるところに於ては、一貨物の生産に費やされたる勞働量は、賃銀率及び利潤と相俟つて、企業家の生産出費を構成し、企業家出費の一要素たる資格に於てのみ生産物の交換比率決定に影響す。Senior が始めて用ゐる Mill, Cairnes が繼承したる節欲なる術語の當否は、今之を論せずと雖も、苟も同額の費用を投じたる生産物にして、直ちに使用に

堪え、若しくは直ちに市場に販賣し得るものと、一定年月の経過を待ちて始めて然かすることを得るものとありて、而して若し二者共に同價值なりとせば、人は必ず後者の生産を避けて、前者の生産を希ふべきこと疑を容れず。而して斯くして必然生ずる一方の比較的供給過剰は、其價格をして他よりも下位にあらしめずんば已まざるべく、二者の價格の等差は、正に生産物完成販賣可能の遅速より起る利不利を償ふものたるべし。此の時の遅速より生ずる利不利は何の名を以て之を呼ぶも妨げずと雖も、此事あるが爲めに、生産物が必然其勞働費用に應じて相交換せらるゝを妨げらるゝの一事は、此名稱の如何を問はず、之を認めざるべからざるなり。Ricardo の價值學説を費用學説の見地よりして論ずる限りに於ては、Senior—Mill—Cairnes を通じての英吉利價值學説の發展は、自ら此に對する當然の批評となるものにして、予の試みたる Ricardo 以後に於ける學説の史的敘述は、また同時に Ricardo に對する批判的論評たるものなり。

(十)

上記諸家の Ricardo 批評は、此人の價值學説の費用學説としての不備を補ふ功は

れは一定貨物量より生ずる總利用 total utility と其特定部分が有する利用、又は或一點に於ける利用の高さを區別す。然れども利用の高さを特に擧げて論ずるの要あるは、一貨物の消費せられたる最後の増量、又は次に消費せられんとする増量に就てのみなりと謂へり。此の最後の増量、若しくは次に加へらるべき増量の利用の高さは、彼れが稱して「最終利用」 final degree of utility と云ふものなり(四九、五三、五五頁)。而して經濟理論の中心をなすものはこの最終利用に外ならず。從來一般經濟學者の誤解は、此の最終利用と總利用との混同より生じたるもの多し。貨物中にありて吾人に取りて最も有用なるにも拘らず、吾人の之を尊重欲求すること大ならざるものあるの理は、此二者の區別に由て始めて之を説明することを得べきなり。人間は水なくして生存すること能はず。而も通常の場合これに何等の價値を認めざるは何故ぞ。他なし、人は通常充分の水を有し、其最終利用零に達し居るを以てなり。吾人は日々無限の利用を水より享くれども、今日有する以上に水を消費せんと欲する念を有せざるなり。然れども一朝干魃の爲め水の供給不足するときは、吾人の水に對して感ずる利用は漸く上昇すべし(五六、七頁)。

斯の如く經濟理論の基礎となるべき利用の性質を説明したる後、Jevons は從來價用の價値なる語の多義曖昧なることを鳴らし、之に代ふるに誤解の惧なき新術語を以てするの必要を論ず。彼れが云ふところに從へば、通常價値なる語は少くも(一)使用價値、(二)尊重若しくは欲求の強弱 (esteem or urgency of desire) 及び(三)交換比率(購買力)なる三個の意義に混用せらる。此三個の意義を表はすに、彼れは價値の一語を以てせずして、各々其場合に應じて(一)總利用、(二)最終利用及び(三)交換比率なる三語を以てせんとするものなり(八七―九一頁)。Smith, Ricardo, Mill 等英吉利學者の研究對象とするところはみな此交換比率なるが、Jevons は之を最終利用に依て説明せんとす。曰はく「任意二貨物の交換比率は交換終了後に於ける二貨物の最終利用の比と反比をなすべし」と。例を以て此理を説かんに、二交換團體(交換當事者)ありて、其一方は穀物のみを有し、他方は牛肉のみを有すと假定せば、穀物の一部と牛肉の一部との交換は、明かに兩交換當事者を益すべし。此の交換の利益が如何なる點まで繼續し、如何なる點に至つて止むべきかは、交換比率と利用の程度如何との定むるところなり。姑らく交換比率は穀物一封度に對する牛肉一封度

なりと假定せんに、穀物所有者に取りて、穀物十封度の利用若し牛肉一封度の利用に劣らば、其團體は更に交換を續行せん事を欲すべく、又對手は牛肉一封度にして穀物一封度より利用小なりと認めなば、亦同じく交換繼續を希望すべし。此の如くして交換は、各當事者が出來得る限りの利益を收め、交換を續行して此以上に及ぶときは、却て利用の喪失あるべきの點に至つて止まるべし。此點は即ち二貨物の増量を既定の比率にて交換するも、交換當事者に取りて各増量の利用は同一にして、當事者は是に由て得喪するところなきの點是なり。今 Δx を以て穀物の小増量を、 Δy を以て之と交換せらるゝ牛肉の小増量を表はさんに、素と穀物も牛肉も共に各々純一同質のものなるを以て、彼の同一物に二價なきの法則に由り、其の如何なる部分も他の部分と異なる比率を以て交換せらるゝ事なし。故に Δx を交換せられたる穀物の全量とし、 Δy を之に對する牛肉の全量とせば、 Δx の Δy に對する比率は $\frac{\Delta y}{\Delta x}$ に對する比率と同一ならざるべからず。即ち

$$\frac{\Delta y}{\Delta x} = \frac{y}{x} \quad \therefore \Delta y = \frac{y}{x} \Delta x$$

なり。交換が右記の如く平準の状態にあるときは、各當事者に對する各増量の利用は相等しからざるべからず。然るに牛肉の増量 Δy は穀物の増量 Δx の $\frac{y}{x}$ 倍なるを以て、此二者の利用の相等しからんが爲めには、牛肉の最終利用は穀物の最終利用の $\frac{y}{x}$ 倍ならざるべからず。茲に於て「交換せられたる二貨物の最終利用は交換せられたる増量の大小に反比例す」との原則を生ずるなり。今交換團體の一方Aは、當初穀物a量を有し、相手方なるBは牛肉b量を有したるに、二者の間に牛肉y量と穀物x量と相交換せられたりとせば、交換完了後に於てAは $a-x$ 量の穀物とy量の牛肉とを有し、Bはx量の穀物と $b-y$ 量の牛肉とを有すべし。次に穀物のAに對する最終利用を $u(a-x)$ を以て、そのBに對する最終利用を $u'y$ を以て表し、牛肉のAに對する最終利用を $v(b-y)$ を以て、そのBに對する最終利用を $v'x$ を以て表はすものとし、而して一物無二價の約束によりて、二貨物の各最終増量は全量と同一比率を以て相交換せらるゝものとせば、交換の平準を得たるところに於ては、交換せられたる二貨物の分量は

$$\frac{u(a-x)}{v(b-y)} = \frac{y}{x} = \frac{u'x}{v'y}$$

なる二方程式に適合するものなり(二〇五—二一一頁)。而してこれ Jevons が以て眞の價值論交換論となすものにして、通常所謂需要供給の法則はこれが一結果に外ならざるものなりと謂ふ(二一二頁)。

(十一)

Jevons は此「新學說」の見地よりして、傳來の勞働價值學說若くは生産費説を其根柢より覆へんとするものなり。此新見地に立つ者の當然先づ傳來學說の欠陥として着目するは、勞働價值説又は生産費説が自由に生産すべからざる貨物の價值を説明すること能はず、或は少くも一切貨物の價值を統一的に説明すること能はざること是なり。今 Jevons も亦た先づ此點を指摘し、Ricardo が勞働投下に由り其量を増すこと能はざる貨物にありては、其價值は勞働量とは全然關係なく一に之を獲んと欲するもの、富裕並に嗜好の度に應じて變動すと謂へる一節を引用したる後、評して曰く、珍貴なる古書古錢骨董品等の如く其價值高くして而かも今日絶對的に生産すべからざる物少なからざるの事實は、たゞ夫れ丈にて價值は勞働に基づくとの觀念を消滅せしむるものなり」と(一八一頁)。又謂へらく、勞働に

由て任意之を生産し得る貨物にありても、その精確に之に相當する價值に於て交換せらるゝこと甚だ稀なり。幾多生産物の市價が其自然價值若しくは費用價值の上下に動搖することは、今日の價值論と雖も之を承認す。又勞働の費やされたるものは直ちに其故を以て之に相當する價值を有するものにあらず。大西鐵道又はテムズ隧道の如き大事業は、莫大なる勞働の結果なりと雖も、而かも其價值は一に之を認めて有用となす者の有無多少に由りて定まるものなり。又一旦費されたる勞働は、貨物將來の價值に對し何等の影響を有するものにあらず。産業は豫望的にして回顧的にあらざるを以て、一企業の成績が其發企人の當初の希望と全然一致するは却て稀有の事に屬するなりと(二八一—二二二頁)。

然らば Jevons の意は勞働を以て遂に價值の決定に參與することなきものとなさんとするにありや。決して然らず。彼れは勞働の價值の原因たることを争ふと雖も、(Labour is never the cause of value) 多くの場合に於て、勞働が價值を決定する事情 (the determining circumstance) たることを否認するものにあらず。蓋し Jevons の所見を以てすれば、貨物の價值は一に最終利用之を決すと雖も、最終利用其者は、間接に

勞働の左右するところたり得べきを以てなり。即ち勞働は二歩の階段を距て、價值に影響するものと云ふ事を得べし。Jevons は此二者の關係を表示すること左の如し

「生産費は供給を定む、

供給は最終利用を定む、

最終利用は價值(交換比率)を定む、

然れども價值の最終利用に由て決せらるゝことを力説する Jevons は斯の如く勞働の間に價值の決定に參與することを明認するも、猶ほ特に人の勞働を價值の調整者と認むる上に於て度を越えざらんことを戒むるを忘れざるなり(一八三頁)。大陸塊太利學派の價值學說は今茲に之を紹介せずと雖も、その Ricardo に對する批評は Jevons の批評と軌を一にするものなり。

(十二)

Jevons (及び塊太利派の新學說と Ricardo の價值學說と果してその孰れを取るべきか。予は Jevons 等の新學說は、以て Ricardo の學說の不備欠陥を補ふ資料たらしむべく、Ricardo の學說の優に新學說と相融合せしめ得べく、その一を取るも必しも全然他を棄つることを要せずと信する點に於て、大體上 A. Marshall 及び Heinrich Dietzel と所見を同じうするものなり。Dietzel は此二家の見解を難じ、Ricardo の客觀主義學說と Jevons 等の主觀主義學說との全然相容れ難きものなること力説せりと雖も、其論據は予の認めて薄弱となすところなり (Marshall, Principles of Economics, 7th ed. 1916, pp. 813-821—H. Dietzel, Die klassische Werttheorie und die Theorie vom Grenzwerten, Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik Bd. XXX N. F. S. 561-605, und: Zur klassischen Wert- und Preistheorie, ebd. 3. F. Bd. I. S. 685—707 1891: Theoretische Sozialökonomik I. Bd. 1895 S. 190-297—Dietzel, Erläuterungen I. Bd. 77-93 参照)。

既記の如く Jevons は價值の起因の斷じて勞働にあらずして、利用若しくは最終利用なること、勞働(生産費)はたゞ多くの場合に於て貨物供給の増減を通じて價值決定の事情たることを得るに過ぎざることを力説せり。先づ論すべきは、Ricardo は果して勞働を以て價值の起因となせしや否や是なり。其價值論の始めに於て Ricardo は記して、既に利用あるものとせば、貨物の交換價值は二個の源泉より生ず、

(commodities derive exchangeable value from two sources) その稀少性と之を取得するに要する労働量と是なりと云ひ、或は労働を以て交換價值の基礎 foundation となし、又その變動の原因 (the cause of its variation) なりと云へり (Principles, pp. 2, 4, 80, 10)。若し是等の語句を嚴格に字義通りに解して、Ricardo の眞意労働を以て價值の起因となすにありたりとせば、此は固より Jevons の説と相容れず、而して、その Jevons 正しくして Ricardo 謬れることは看取するに難からざるところなるべし。蓋し労働を以て起因となすときは、古書古泉骨董品珍重すべき名酒等の如き、全然労働の生産物たらざるか、或は今新たに労働の投下に由りて其供給を増すこと能はざるもの、價值は、固より之を説明すること能はざるを以てなり。等しく價值を有するもの、中に、其原因なくして價值あるもの、其原因ありて價值あるものとありとなすは、理に於て容すべからざるところなるを以てなり。Ricardo は明かに當初より貨物を任意人力に依りて増加し得べきものと然らざるものとに分ち、前者に限りてのみ労働に由りて其價值を説明せんとしたるものなりと雖も、苟も任意に増加し得るものも然らざるものも、共に等しく價值を有する以上は、二者の一方が欠くところの條件を以て價值の原因となす事は失當なること言を俟たず。姑らく一步を譲りて、任意可増物の價值は必要労働量に由りて左右せられ、不可増物の價值は其稀少性に由りて、或は又其購買者の富力及び嗜好の程度に由りて決せらるるとの命題には遺漏なきを得たりとするも、猶ほ吾人は此以上に、任意可増物と不可増物とを通じて有ゆる有價物の價值を説明すべき統一の普遍的法則を要求する權利あるべきなり。此點に於て Jevons は明かに Ricardo に優れり。

不可増物の價值に關する Ricardo の説明と Jevons の新説とはたゞ精粗の差あるに止まり、兩者よく相容るゝものなることは言を俟たず。茲に問題とすべきは、たゞ任意可増物の價值に關する Ricardo の説が果して Jevons の説と兩立し難きものなりや否や是なり。

Ricardo が任意可増物の價值は或は其生産に要する労働量之を決定すと謂ひ、或は労働量の増減と共に昇降すと謂ひたるは、何の根據に本つけるものぞ。既に屢々言及したる如く、任意可増物にありても、其の個々現實の市場價格は、時々の需要供給關係に由りて決せられて、其生産費の高低に拘はることなきは、Ricardo の認め

たるところなり。たゞ此くして成立せる市場價格にして、生産上に費されたる労働量が定むる比例以外に逸するときは、玆に利潤率の不均一を來たし、資本は市場價格の價值(労働量に依て定められたる)に及ばざる産業より回收せられて、その價值以上に上れるところに集中し、斯くして需要供給の關係を動かすを以て、究局貨物の市價は其價值に一致せずんば已まざるの傾あることを説くのみ。労働量は生産額に對する影響を通じてのみ交換比率を動かし得ること、假令言語の上に於てならずとするも、思考の過程上に於ては Ricardo の明かに認めたるどころなり。而して需要の増加が何故に價格をして騰貴せしめ、供給の増加が何故に之をして下降せしむるかを明にするは、Jevons の最も得意とする領域にして、Smith, Ricardo の共に其説明を企てずして已みたる、人生必須の物に對する吾人の欲求の切ならずして、却て一見無用の觀ある物に對して人の高價を投じて吝まざる、使用價值と交換價值との背反は、Jevons の總利用と最終利用との區別を俟つて其真相始めて明かなることを得たるなり。然れども此の Jevons の新着眼は決して Ricardo の説と相容れ難きものにはあらずして、たゞ其不備を補ひ、其の等閑に附したる一面を

取りて之を分析詳論せしに外ならざるなり。Jevons は労働は價值の起因にあらずと力説すれども、用語に拘束せられずして Ricardo の論理を追へば、彼れも亦決して労働投下の一事の單獨に一貨物の價值を決定することを主張せしにあらず。その謂はんと欲するところは、任意可増物にありては、労働費用の比例以上に高價なるもの、供給は早晚増加し、其比例下に低廉なるもの、供給は早晚減少すべきを以て、労働費用との比例を失したる市價を成立せしむるか如き需要供給關係は永續し難しと云ふこと是れのみ。Ricardo は未だ一貨物の總利用と最終利用とを區別することを解せざりしを以て、一物の利用は以て其交換價值の尺度とすべからず、其利用大にして其交換價值或は僅少或は絶無なるものあり、其交換價值大にして其利用甚だ少なるものありと云ひたれども、今これに説くに此二利用の區別を以てし、而して後 Jevons の言を引き、労働は貨物量を左右することに由りて(即ち市價の労働費用以上に昇れるときは其供給を増加し、その此以下に降れるときは供給を減少せしむることに由りて)其最終利用を決定し、最終利用を決定することに由りて其價值を定むるものなりと告ぐるも、恐らくその了解に苦しまざるこ

と云ふならんと信ず。勞働を價值の起因にあらずしてこれが決定事情に過ぎずと云へる Jevons の言も亦 Ricardo の必しも争はざるところならん。

以上述ぶるところを以て觀れば、Ricardo が所説によるも貨物の交換比率を決するものは、畢竟其供給と之に對する需要とに外ならず。たゞ其供給に確定不動なるものと、任意増減し得べきものとの差違あるに過ぎざるなり。故に若し Ricardo にして、利用あるもの、價值取得の源泉には稀少性と勞働との二ありと説くの亂雜を避けて、價值は利用並に稀少性之を決するも、稀少性其者は人爲を以て之を奈何ともすべからざるものと勞働の投下に由て其程度を上下し得るものとの別ありとなし、一般的價值法則に對する一補則として其勞働價值説又は生産費説を説きしならんには、その新學説と相容れ得べきこと遙かに一層明白なるを得たるならん。而して此の如き一般的價值法則を立つるに方りては、價值論の利用若しくは需要の一面より發足すべくして、貨物生産上の條件(費用)の次位に置くべきものなること明白なるべし。素とより Ricardo は一物の價值を有せんが爲めには、先づ利用なかるべからざることを認めたりと雖も、彼れは未だ一物の種類としての抽象的有用無用と、一物に對する現實的欲求の強弱と、即ち Jevons の所謂總利用と最終利用とを辨別するの法を解せざりしを以て、一物の利用が如何にして、之に對する需要を導き出すかを説明すること能はず。此點に於て Jevons が經濟理論に貢獻するところの甚だ大なることを認めざるべからざるなり。たゞ Jevons の貢獻は大なりと雖も、彼れの「新説」は決して Ricardo を覆へすものにあらずして、その詳説を怠り、若しくは詳説すること能はざりし一價值の一般的基礎論を補ふに外ならざるものなり。

(十三)

Dietzel は限界利用學説を寧ろ自明の理として承認しつつ、同時に價值の問題は Ricardo 既に之を解決したりと明言するものなるが、その此點に關し利用論者の攻撃に對して、Ricardo 辯護の爲めに説くところには傾聽すべきものあるを以て、茲に其一節を引用すべし。曰く「正統派價值學説は價值の成立せんが爲めには、有用性 Nützlichkeit と有限性 Begrenztheit との同時に作用せざるべからざることを決して看過したるにあらず。嘗に Galiani 及び Turgot——新主觀的價值論の先驅者として

好んで引用せらるゝ——のみならず、Ricardoも亦同じく此事を認識せりと。而して Dietzelは Ricardoが不可増と任意可増と貨物の二種を分ち、前者の價值は稀少性を決し、後者の價值は投せらるべき労働量之を決することを云へる一節の文句を引用したる後續けて曰く、古典的價值學說の核心を含める此論述を取りて新派學者(限界利用論者)は之を Ricardoは「二元的價值理論を與へて何等の終始一貫せる」理論を與へずとの非難の材料としたり。此非難は當らず。Ricardoはたゞ新派學者が抗議して先頭に立つる一般的命題——有用性と有限性とは價值の兩源泉なりとの命題——を先づ與ふることをせずして、其性急なる論法に従て直ちに有限性の兩態を區別することに由て、直ちに次段の論究に進入したる限りに於てのみ責を負ふべきものとす。其價值の「其稀少性に由て定めらるゝ諸財は絶對的、有限量の關係に立ち、其價值の労働投下に由て定めらるゝものは相對的、有限量の關係に立てり。此點に於て Ricardoは例の如く怠慢の罪を犯し、而して不幸にして多くの之に倣ふものを出せるなり。然れども Ricardoは價值源泉に關して相容れざる二の公式、價值成立の二方法を説きしにあらざるなり。彼れが一本原理を説く

上に於ての性急なる論述法は固より責むべしと雖も、或種の財は其價值、有用性と稀少性とより生ずと云ふ斷案は、財の大部分は其價值、有用性と労働投下とより生ずと云ふ斷案と撞着すと主張する性急なる批評は、互に大に責むべきものなり。：『有用性と稀少性』の公式と『有用性と労働投下』の公式とは、其名は異なれりと雖も實は一なり。蓋し第二の公式に於ては『労働投下』擧げらると雖も、是に由て擧げらるゝものは、稀少性の兩原因の一に外ならざるなり。或種の財は、労働之を増加すること能はざるを以て稀少なり。これ Ricardoの「一種の財」にして、此場合彼れは稀少の原因を示せり。大多數の財は詢に増加することを得べしと雖も、たゞ労働に由てのみ増加し得べきが故に稀少なり。此の Ricardoが所謂「別種の財」の稀少の原因は、労働其者が稀少なる、其所有量有限なる資料なること是なり。労働を費すことを要する財はみな稀少なり」と。(Theoretische Sozialökonomik S. 228-230—Jahrb. für Nat. Stat. N. F. XX S. 565-6.)

此辯護論にして當を得たりとせば、Ricardoの價值學說全體は近時の利用學說と相調和し得べきものなり。たゞ彼れの労働價值學說又は生産費説は、前記の如く

一般的價值法則の範圍内に屬する一補則に過ぎざるものにして、Dietzも亦之を認むることを見るべし。

(十四)

貨物交換比率の需要供給に由て左右せらるゝこと上述の如くなりと雖も、供給は需要に追隨して、價格騰貴すれば増進し、價格下落すれば減退せんとするの傾向あること争ふべからず。而して、供給にしてよく容易に速かに需要に追隨し得る場合に於ては、貨物の價格は久しきに亘りて其生産費より離隔することなし。Ricardoは此點に重きを措き、而して大多數貨物にありては、供給は直ちに需要に追隨することを得るものと認め、貨物の利用又は之に對する需要の一面を輕んじて、價值の生産費に由て支配せらるゝことを力説したるなり。即ちそのMalthusに與へたる書簡中に曰く「Say氏はその一貨物は其利用に比例して價值を有すと主張するときは、價值なる語の眞意義を正解し居らず。若し購賣者のみ貨物の價值を左右すべしとせば實に氏の所言の如くなるべし。詢に斯る場合には凡ての人は諸物に對して、彼等の之に對する尊重の度に應じて價格を投ずることを敢て辭せざる

べしと雖も、予の見るところを以てすれば、購賣者は價格の調節に與かること最少なるを事實とするものゝ如し。そは凡て、賣手の競争に依て行はれ、如何に買手にして眞に鐵に對して金に對するよりも多額の價格を敢て投せんとするも、供給は生産費に依て左右せらるべきを以て、之を爲す事能はざるべし。從て金は鐵よりも有用ならざる金屬なること、恐らく全人類の認むるところなるにも拘らず、必ずその鐵に對する比例は現在の如くならざるを得ざるなり。……貴下は需要供給價值を左右すと云ふも……此は何事をも意味せずと信ず。價值を左右するものは供給にして、供給其者は比較的生産費に依て支配せられ、貨幣に現はされたる生産費は労働の價值と並に利潤とを意味すと。又曰く「予は需要の穀物價格に對する影響をも、またその自餘一切物の價格に對する影響をも争はずと雖も、供給は直ちに其踵に接して之に追隨して、價格支配の權を其手中に收め、之を支配する上に於てそは生産費に依て決せらる」と(pp. 173, 176, 179)。詢に供給にして能く直ちに踵に接して需要の變動に追隨することを得ば、價格は生産費之を左右すと云ふことを得べしと雖も、而かも猶ほ此場合に於ても、需要はその價格に對する作用を停

止したるにあらざりて、供給の追隨が絶えず二者をして生産費と一致する點に於て相均衡せしむと云ふに過ぎざることを忘るべからず。然れども貨物の供給にして、字義通りに之に對する需要の踵に接して追隨し得るものは、寧ろ極めて稀なる例外にして、吾人の現に目撃するところは、一方に於て其存在量の全然人爲を以て増加すべからざる稀少財と、需要の變動に連れて供給の即時之と歩にして増減し得るものとの兩極端間に於て、供給の需要に適應し得ることの或は遅く或は速かなる無數の階等の存することは是なり。而して此一方の極端に於ては、交換比率は一に需要の決するところにして、生産費は全く之に影響することなく、反對の極端に於ては需要の作用は停止したるにはあらざるも、猶ほ生産費獨り價格を左右するの觀を呈し、必しも語法の嚴格を要せざる場合には、生産費價格を決すと云ふも事實上不可なきなり。此兩極端の中間に於ては、姑らく需要を既定不變のものとするときは、時を経ること久しきに隨ひ、供給は漸く需要に追及し得るを以て、短時日を取りて見るときは、價格は需要専ら之を決するの觀を呈し、假すに時を以てするに從ひ、是に對する生産費の影響漸く顯はれ來るべし、最終利用の說に基づ

きて精緻なる需要理論を立て、同時に Ricardo-Mill の傳統を棄てざらんと欲する Marshall が、價值に對する利用と費用との影響に就て論ずるところは畢竟此に歸着するものなり。

Marshall は利用と費用とその何れか果して價值を支配するとの間に對する解答の結論として、「吾人は通則として、考察する期間の短ければ短きに從ひ、價值に及ぼす需要の影響に注意を分つこと多からざるべからず。又期間長ければ長きに從ひ、價值に對する生産費の影響益々重要となるべし」(Principles, p. 349)と云へり。然れども利用も費用も何れも單獨に價值を決定するものにはあらざる事を示さんが爲め、彼れは此二者を缺の双刃に喩えたり。謂へらく「價值は利用に由て支配せらるゝか、生産費に由て支配せらるゝかを論ずるは、猶ほ紙片を剪るは缺の上刃なるか下刃なるかを争ふの不合理に等しからん。詢に一方の刃を固定して、他の一方の刃を以て剪裁を行ふ場合には、吾人は略して剪裁は第二の刃に依て行はれたり」と云ふことを得べしと雖も、此叙述は嚴に正確なるものにあらずして、事實の嚴格なる學問的記述たらんことを求めずして、單に一個の通俗的記述を以て甘す

る限りに於てのみ寛假せらるべきなり。貨物の供給量を固定せるものとして、價格は需要に由て決すと云ひ、收益不變の法則に従つて生産増加行はるゝ場合に、姑らく貨物に對する充分の需要あるものとして、常規價格は生産費の支配するところなりと云ふも、亦同じく嚴格なる合正を求めざる限りに於ては寛假する事を得べきなりと。(pp. 348-9, 820)

本篇の論題とするところは、畢竟(一)貨物の交換比率を支配するものは、生産上に費さるゝ労働量なるか、或は労働量を其一要素とする廣義の生産費なるか、(二)價值を支配するものは費用なるか、利用なるかの二問題に歸着すべし。而して第一の問題に就ては、予は労働價值説の維持し難くして、Ricardo自身も遂に之を固執せず、其後繼者に至ては更に一層之より遠ざかれることを述べ、第二の問題に就ては、新しき利用説は費用説の重大なる不備を補ふものなりと雖も、必しも是と相反撥するものにあらざるの理を明にせんと試みたり。費用は畢竟利用喪失 *Nutzenverlust* に外ならずとし、利用と費用とを同水準上に置きて、Ricardo説の限界利用説と同原

則に基づくものなることを論證せんとしたる Diezelの獨創的なる試みは、Ricardoの解釋としては首肯を憚るところなりと雖も、その「限界利用學説は舊建築を破壊せずして、之を擴張せり」(Theoretische Sozialökonomik S. 296)との結論は、予の同意するところなり。たゞ費用學説なるものは、普遍的に一切の價值を説明すること能はざるを以て、之を認むるは、一般的價值法則に従屬する一補則としてなるを記せざるべからざるなり。(完)